防災（ぼうさい） 減災（げんさい）

◆災害の種類（自然災害）（他→人為的災害）

雨（大雨・集中豪雨）に起因するもの － 洪水（河川の氾濫、内水氾濫）、土砂災害 （斜面崩壊、がけ崩れ、土石流、地すべり）など
風に起因するもの － 強風・暴風、竜巻、高潮、波浪
雪に起因するもの － 雪崩、積雪、吹雪
雷に起因するもの － 落雷
地震
地震に起因するもの － 液状化、津波、岩屑なだれ、がけ崩れ、（地震）火災
噴火
噴火に起因するもの － 降灰、噴石、溶岩流、火砕流、泥流、山体崩壊、津波

◆**防災**とは、災害を未然に防ぐために行われる取り組み。災害を未然に防ぐ被害抑止のみを指す場合もあれば、被害の拡大を防ぐ被害軽減や、被災からの復旧まで含める場合もある。災害の概念は広いので、自然災害のみならず、人為的災害への対応も含めることがある。

類義語として、防災が被害抑止のみを指す場合に区別される減災（あらかじめ被害の発生を想定した上で、その被害を低減させていこうとするもの）、防災よりやや広い概念である危機管理（大規模な自然災害・事故など不測の事態に備え、かつ起こった時に適切に対応する施策・体制）、災害からの回復を指す復興（一度衰えたものが再び勢いを取り戻す事を指す）などがある。

◆自助・共助・公助

災害時の対応は主体の違いにより、自ら対応する「自助」、ご近所などの共同体で助け合う「共助」、消防や自治体に助けてもらう「公助」の 3 つに区分することができる。

災害時には自助 ： 共助 ： 公助の割合が 7 ：2 ：1 になると報告されている。（阪神・淡路の例等）

◆被害抑止

被害が生じないように講じる対策。土地利用の管理、河川の改修、建物の耐震化、災害の予報・警報など。

◆被害軽減

被害が生じてもそれを少なくし、立ち直りがスムーズになるよう講じる対策。災害対応マニュアルや防災計画の作成、防災システムの開発、人材育成、災害の予報・警報など。

一方、災害発生後の対応も大きく 2 つに分けられる。

◆応急対応

救助、消火、医療、避難所の運営など。

◆復旧・復興

住宅や生活の再建、心のケアなど。

■防災教育・防災訓練と避難（臨機応変に対応できる力を養う）

堤防や建物の耐震化のような施設強化では防ぎきれないレベルの災害において、人命を守るのは**避難**である。そして、災害時に適切な方法・場所・時期での避難（予めの避難経路⇒避難する際に通る道筋のこと）を判断する力を養うのが防災教育や防災訓練の 1 つの目的である。

★災害時に命を守る一人一人の防災対策

■一番大切なのは、一人一人が取り組む防災対策

◇家の中の安全対策をしておく
- タンスなど家具類
- 食器棚
- 本棚
- テレビ
- 冷蔵庫など家電類
- 窓ガラス

あしたの暮らしをわかりやすく 政府広報オンライン等参照

消防庁 防災マニュアル －震災対策啓発資料－ 等参照

◇地震が発生したときの、身の守り方を知っておく
- 家の中では
- 商業施設などでは
- エレベーターで
- 街にいるときは
- 自動車運転中のときは
- 電車・バスに乗車中のときは

◇津波警報・津波注意報が出たときは

◇ライフラインの停止や避難に備えておく
- 災害時に備えた備蓄品
- 非常持ち出し品

◇安否情報の確認方法を家族で決めておく
- 災害用伝言ダイヤル
- 災害用伝言板

◇もしもの時の情報収集方法

◇避難場所や避難経路の確認

防災対策のキーワードは『気　』です
気づくとはそれまで意識になかったことに、思いが及ぶ。気がつく。
「ミスに一・く」「忘れ物に一・く」　気付きは「あっ！そうか！」
という感覚です。災害時の対応は時間との闘い。

災害に出会うという事は、当り前（普通）な日々を過ごせなくなる事。
従って何でもない生活、当たり前の毎日がとてもありがたいことです。

◆風水害対策

家の内外の風水害対策をしましょう

- 屋内では
- 屋根
- ベランダ
- 雨どい、雨戸
- 窓ガラス
- 外壁

◆火災対策

火事だ！その時どうする

- 早く知らせる
- 早く消火する
- 早く逃げる

◆土砂災害対策

住んでいる地域の危険度を知る

- 住んでいる場所が「土砂災害危険箇所」かどうか確認する
- 雨が降り出したら土砂災害警戒情報に注意する
- 土砂災害警戒情報が発表されたら早めに避難する

★防災が勉強できる機会（順不同）→　但し、生かすも捨てるも自分次第

◇専門家による講演会での聴講
◇防災に関する講座への受講
◇消防署等行政による防災研修会への出席
◇地域での防災訓練への参加
◇横浜市のように家庭防災員になる
◇自治会・町内会の役員（防災担当）を担う
◇避難所（地域防災拠点）運営役員を担う
◇自主防災組織への加入
◇もしも自主防災組織が地域になければ設立発起人を担う
◇市民団体による防災会議・活動への加入・参加
◇被災地での支援活動（ボランティア体験など）
◇「そなエリア東京」「横浜市民防災センター」など防災施設見学
◇消防署による防災訓練への見学
◇評判の良い防災拠点運営委員会等の見学
◇防災活動で活躍（詳しい）されている人の話を真摯に聴く心がけと何故と問い合わせる勇気
◇提供された物事に対し、反応を示すことにより、さらに学べる、教えてもらえる
◇知識の吸収は、消化不良（あえて言うならば放置）にならない理解力、熱い思いと探求心
◇インターネット（ホームページも含む）による防災知識の吸収
◇防災アンテナを張る（何事も関心度による）
◇文献による情報収集や研究（ハンドブックやマニュアルも含む）
◇新聞・テレビなどマスメディアからの記事・情報を敏感に感じる姿勢【感性】
◇シミュレーションゲーム等ワークショップやイベントへの参加
　・ＤＩＧ，ＨＵＧ，クロスロードゲーム、防災ウォークラリーなど
◇防災クイズの作成、出題吟味作業及び発信行為
◇防災用語集の整理・まとめ作業及び発信行為
◇防災関係の資料作りと発信行為
◇発信するという行為は喫茶店で、一人で考える、見直す、チェックする
◇消防団への加入
◇防災士、応急手当普及員（救急救命）等の資格取得
◇例えば横浜防災ライセンス指導員等の資格取得
◇介護職員初任者研修（旧ヘルパー２級）の資格取得
◇地域防災指導員制度の確立と資格取得
◇講演や研修会などの講師体験や防災コーディネーター役を担う
◇防災活動を通して切磋琢磨する仲間づくり【Win-Win の関係】
等々

大川小の悲劇と釜石の奇跡について

◆大川小学校を襲った津波の悲劇

石巻市釜谷地区の北上川河口から約４㌔の川沿いに位置する大川小学校は、２０１１年３月１１日の東日本大震災で全校児童１０８人の７割に当たる７４人が死亡、行方不明となった。

あの日、あの時、学校と地域で何が起き、人々はどう行動したのか。その報道記事を追ってみた。

一連の報道の中、河北新報社は震災からほぼ半年となる９月８日、大川小学校の惨状を証言をもとに克明に検証しており、これだけの犠牲者を出した要因にも触れている。

下図に小学校のマップとともに、当時の津波浸水予想図（市のハザードマップ）を貼った。河北新報社は、釜谷地区はこれまでに津波が到達した記録がなく、住民は大川小学校がいざという時の避難所と認識していたこと、しかも、山と堤防に遮られていて津波の動向が把握できない環境だったこと等が避難を遅らせた要因として挙げた。これらを勘案すると、宮城県も石巻市も昭和三陸大津波レベルなら大川小学校には津波が来ないことを公言し、それ以上の大津波への対応は全く考慮していなかったと言わざるを得ない。もし大津波が来たらここは危険との意識が住民に無かったのはそのためだったと言える。大地震だったにもかかわらず、５分で完了可能な裏山への避難が選択肢の後方へ押し下げられてしまったのは、大川小学校に集まった人々のほとんどに危機意識が欠けていたためであり、そのように仕向けてしまった一因は行政にあったと推察できる。

大川小学校周辺のマップ

◆大川小学校での地震発生からの行動経緯

3月11日 午後2時46分	地震発生。児童は机の下に隠れる。教諭が校庭に避難するよう指示
午後3時頃	教諭らが校庭で児童の点呼。避難場所を巡って議論。防災無線が大津波警報の発令を知らせる
午後3時25分頃	市の広報車が津波襲来を伝える。大橋の基点へ避難開始
午後3時37分頃	大橋の基点付近から溢れた津波が、児童らを前面からのみ込む

石巻市教委などの調査に基づく

◇河口から４キロ◇

大川小は東北最大の大河、北上川右岸の釜谷地区にあり、太平洋に北上川が注ぐ追波湾の河口から４キロ上流に位置する。同県教委によると大川小の児童は５６人が死亡、１８人が行方不明。また教諭については当時、校内にいた１１人のうち９人が死亡、１人が行方不明になった。校長は震災当時、外出して不在だった。

保護者や住民らの証言では、児童は１１日午後２時４６分の地震直後、教諭らの誘導で校舎から校庭へ移動した。ヘルメット姿や上履きのままの子もいた。保護者の迎えの車が５、６台来ており、「早く帰りたい」と、泣きながら母親にしがみつく子もいた。

同４９分、大津波警報が出た。教諭らは校庭で対応を検討。校舎は割れたガラスが散乱し、余震で倒壊する恐れもあった。学校南側の裏山は急斜面で足場が悪い。そうした状況から、約２００メートル西側にある新北上大橋のたもとを目指すことになった。そこは周囲の堤防より小高くなっていた。市の防災マニュアルは、津波対策を「高台に上る」とだけ記しており、具体的な避難場所の選択は各校に委ねられていた。

◇想定外◇

午後３時１０分過ぎ、現場に居合わせた男性（７０）は、児童らが列を作って校庭から歩き出すのを目撃した。「教諭に先導され、おびえた様子で目の前を通り過ぎた」

その直後だった。「ゴーッ」とすさまじい音がした。男性は児童らとは逆方向に走り出した。堤防を乗り越えて北上川からあふれ出した巨大な波が、学校を含む地区全体に襲いかかった。住民や男性の証言を総合すると、津波は児童の列を前方からのみ込んでいったという。列の後方にいた教諭と数人の児童は向きを変えて男性と同様に裏山を駆け上がるなどし、一部は助かった。

宮城県沖で二つの断層が連動した地震が発生した場合を想定した津波浸水予測によると、河口付近の高さ５～１０メートルに対し、小学校周辺は１メートル未満。だが、今回の津波は２階建ての同校校舎の屋根まで乗り越え、裏山のふもとから約１０メートルも駆け上がった。また児童らが避難しようとした新北上大橋のたもとでも、電柱や街灯がなぎ倒されるなど津波の被害を受けた。

「ここまで来るとは誰も思わなかった」。同地区の住民は口をそろえる。同市河北総合支所によると、防災無線の避難呼びかけは一度きり。同支所によると、釜谷地区全体での死者・行方不明者は住民の約４割の１８９人。津波を見ようと堤防に行ってさらわれたり、自宅にとどまり犠牲になった人も多かったという。

◇保護者の思い◇

県教委によると地震と津波で死亡した同県の小学生は１２７人で、４割以上が大川小の児童だ。８日には行方

不明児童の１人とみられる遺体が見つかった。学校の周辺は今も我が子の手がかりを追い求める親の姿が絶えない。「当時の状況を知りたい」という保護者らの思いは切実だ。

３年生の孫を亡くした男性（６１）は遺体発見まで３週間を要した。「せめて何年生が、どの方角に逃げたのかだけでも知りたい。捜索にもある程度の目星が必要。みんな早く見つけてやりたい一心なんです」と語る。

関係者から避難状況を聞き取った同市教委は「想像を絶する大津波だった。学校の判断は致し方なかったと思う」とする。市教委によると、校長が９日夜、生還した教諭から状況を聞き取った結果を保護者に伝えるという。

「大川小学校の鎮魂」

「大川小学校の悲劇、語り継ぐ」教員の遺族の大学生が語り始めた

亡き父は大川小教員
引け目乗り越え語り部に

自分は「教員の遺族」なのか、「大川小の遺族」なのか。東日本大震災の津波で父（当時５５歳）を亡くした宮城県教育大３年生佐々木奏太さん（２１）の悩みはふかかった。父は、児童７４人が犠牲になった宮城県石巻市立大川小学校の教員だった。児童の遺族と顔を合わせるのはつらかったが、その遺族の言葉に救われたこともある。この冬から語り部の一人として、他の遺族とともに悲劇を伝えている。

長男、児童遺族と交流

◇「救えた命」◇

「救えた命だったこと。先生たちも一生懸命だったこと。この二つの事実を責めるのではなく、問うのです」

大川小の旧校舎前で平成２９年３月７日、次女みずほさん（同１２歳）を亡くした佐藤敏郎さん（５３）が、見学に来た大学生３０人を前に語りかけた。隣には。小さくうなずく佐々木さんの姿があった。

震災当時、「大川小の悲劇」は大きくニュースになった。「先生がいたのに、なんですぐ逃げろって言わなかった」。テレビからは遺族たちの悲痛な叫びが流れた。２０１１年春。高校生になったばかりの佐々木さんは、ただ画面を見つめることしかできなかった。

◇教員の夢◇

佐々木さんは一人っ子。父を尊敬していた。２年生の担任で、家ではよく教え子の話をしてくれた。震災直後に受けたテレビの取材には、「父と同じ教師になりたい」と答えた。大学で小学校の教員を目指した。

教育実習の手引きには「先生は子供と信頼関係を築く」などの言葉が並んでいた。ただ、「どうすれば子供の命を救えるのか」の答えは見つからなかった。

昨春参加した教育実習の説明会。亡くなった父や子供たちのことを考えると涙があふれ。ペンを持つ手が何度

も止まった。「頑張らなきゃいけないと思って無理していた」。体を壊し、教育実習を辞退した。

◇冷静な言葉◇

遺族たちは学校側の責任を問う訴訟を起こした。１審判決を１か月後に控えた昨年９月、佐々木さんは三男雄樹君（当時１２歳）を亡くした佐藤和隆さん（５０）に合いに行った

佐藤さんとはフェイスブックを通じて知り合い、「教員の遺族」であることを打ち明けた後も交流が続いていた。しかし、判決の内容次第では、関係が終わってしまうかもしれない。直接会って胸の内を聞いておきたかった。

罵倒されることも覚悟していたが、佐藤さんは冷静だった。「俺は今でも先生が子供を守るべきだったと思うよ。でも、先生たちも最後まで頑張ったのはすごく分かる」と言ってくれた。

教員たちは北上川の堤防に近い小高い場所（標高７㍍）に子供たちを避難させようとした。だが、川を遡った津波は堤防を越えた。昨年１０月の仙台地裁判決は、裏山に避難すべきだったとして教員の過失を認めた。

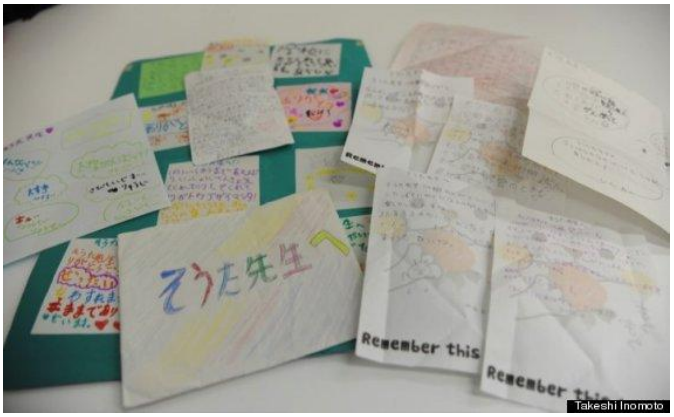
「父に守れなかった命を僕が守れるのか」。教員への夢が断ち切られたと感じた。傍聴席を出た後、母に電話をかけた。「もう先生にはなれないや」。迷いに決着がついた。

◇優しいまなざし◇

教員にはなれなくても、子供たちの命を守るためにできることがあるのではないか。「大川小の遺族」の一人として、悲劇の教訓を語り継ごうと思った。

遺族との交流は広がり、よく「奏太」と声をかけられるようになった。そんな姿に佐藤敏郎さんは「奏太の覚悟が、双方の隔てていた壁に一つの風穴をあけてくれた。穴が塞がれないように、これからも見守っていきたい」と優しいまなざしを向ける。

「先生や子供たちの命をただの犠牲に終わらせたくない。未来へつなぎたい」。語り部になった佐々木さんが、よく口にする言葉だ。父が自分に託した願いのような気がしている。

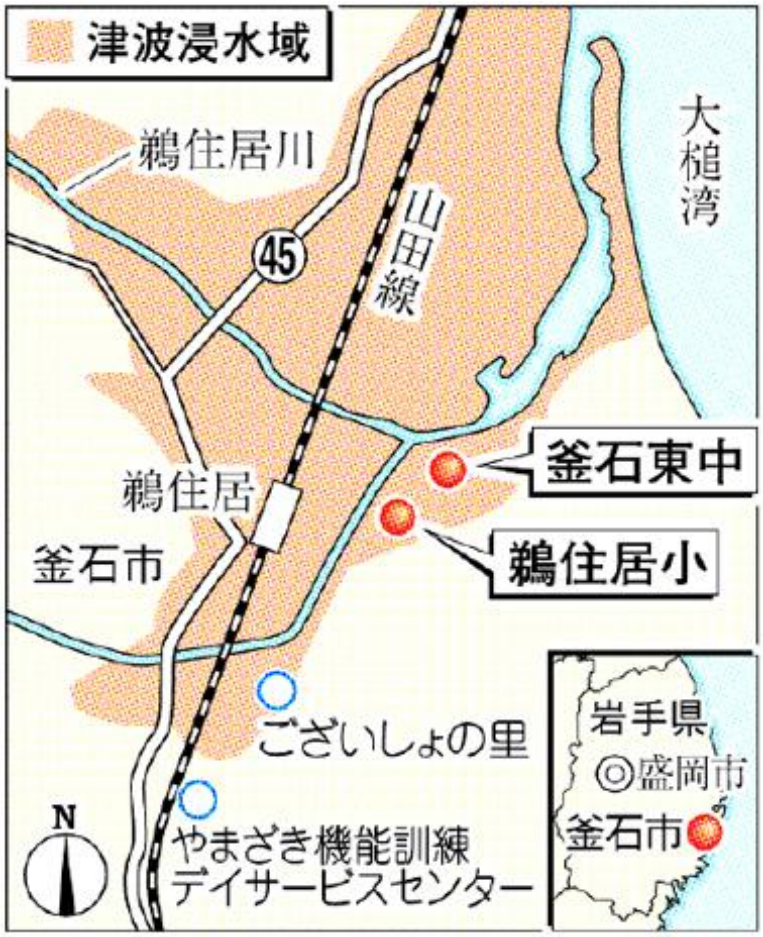


◆釜石の奇跡（岩手県釜石市釜石東中学校）

＜アーカイブ大震災＞教え通りひた走る

防災を研究する群馬大学大学院理工学府の片田敏孝教授

大津波警報が出る中、一緒に逃げる鵜住居小の児童や釜石東中の生徒ら＝２０１１年３月１１日、釜石市（釜石東中提供）



死者・行方不明者が約１３００人に上る岩手県釜石市。大槌湾に面した鵜住居（うのすまい）地区は津波で壊滅状態となったが、鵜住居小と釜石東中にいた児童、生徒計約５７０人は全員無事だった。中学生や小学校の上級生が小さな子どもたちの手を引いて逃げるなど、両校の迅速な避難劇は「奇跡」とも言われている。２０１１年３月３１日の朝刊は、前日の釜石東中の卒業式で平野憲校長（５３）が「君たちは誇りだ」との言葉を贈ったと伝えている。

◎その時　何が（６）奇跡の避難（釜石）

あと４分、５時間目の授業が終わるのはもうすぐだった。激震に見舞われた午後２時４６分。鵜住居小には１～６年生の児童約３６０人がいた。

「恐怖のあまり、泣いている子もいた」。当時６年生のクラスを受け持っていた横沢大教諭（２８）が振り返る。

指示はすぐ飛んだ。３～６年生は最上階の３階へ集まり、１、２年生は校庭へ出た。真壁信義副校長（４９）は「申し合わせ通りの動き」と話す。

尋常ではない揺れ。外を見れば、隣接する釜石東中の生徒たちがバラバラになって南へ走っている。教師たちは即座に「逃げろ」と号令を掛けた。時計は午後３時を指す直前だった。

停電で放送機器は使えない。約２０人の教職員は声を張り上げ続けた。「走るんだ！」。目指したのは南へ約６００メートル離れた民間の介護施設「ございしょの里」。泣きじゃくる１、２年生の手を上級生が引いた。

釜石東中の生徒約２１０人ら、介護施設に集まった両校の児童生徒は約５７０人。そこは指定避難所でもあった。施設の入所者や職員、近所の住民も加えると７００人はいた。突然、中学校の教員が叫んだ。「裏の山林が崩れそうだ」

子どもたちはまた、走った。目指したのは南に約４００メートルの「やまざき機能訓練デイサービスセンター」。中学生は小学生と手をつないだ。大人も逃げた。

ございしょの里に小学１年と４年の娘２人を迎えに来たパート及川真美子さん（３２）は「迎えに来た親たち

も、一緒に逃げた」と言う。

午後３時２０分ごろ。学校の方角を見ると、十数メートルの高さの津波が両校の校舎を丸ごとのみ、介護施設も襲い、迫ってきた。「逃げないと危ない」。誰彼となく悲鳴のような声が上がった。

児童の一部はデイサービスセンター東側の山林を駆け上がり、残りはさらに南へ、走った。

津波はデイサービスセンターの手前で止まった。想定浸水区域から１キロ先にまで達していた。

鵜住居はすり鉢の底にあるような街だ。両校の北には大槌湾に注ぐ鵜住居川河口があり、南は山林が迫る。西はわずかに平地があり、高い建物などない。

同地区では７割近い建物、市の被災全体の４割に上る約１８００戸が被災したが、小中学校では一人の犠牲者も出さなかった。

釜石東中の村上洋子副校長（５３）は「日ごろの防災教育のおかげ」と語る。４年前から群馬大などと協力し、津波防災教育を授業に導入した。２年前からは年に１度、鵜住居小と合同訓練も実施。「小学生を先導する」「まず高台に逃げる」との教えを徹底してきた。

三陸地方には、津波が来たら取る物も取らずてんでばらばらに逃げるという「てんでんこ」の言い伝えがある。

「『てんでんこ』が大事だって何度も教わっていた。思いっきり走った」と、３年生の佐野凌太君（１５）は言う。

当日、欠席などしていた両校の３人は津波の犠牲になった。「奇跡」の裏には悲しみもあった。（山口達也）＝２０１１年５月１９日河北新報

◆　　◆　　◆

２０１１年３月１１日の東日本大震災発生以来、河北新報社は、被災地東北の新聞社として多くの記事を伝えてきた。

とりわけ震災が起きた年は、記者は混乱が続く中で情報をかき集め、災害の実相を明らかにするとともに、被害や避難対応などの検証を重ねた。

中には、全容把握が難しかったり、対応の是非を考えあぐねたりしたテーマにもぶつかった。

５年の節目に際し、一連の記事をあえて当時のままの形でまとめた。記事を読み返し、あの日に思いを致すことは、復興の歩みを促し、いまとこれからを生きる大きな助けとなるだろう。

避難時の対応１

◇冷静さを保って素早く避難◇

2011 年３月 11 日 14 時 46 分頃、地震が起きたのは生徒たちが放課後の部活動の準備をしている真っ最中でした。訓練通りに全員が校庭に集まると、「点呼はいいから、すぐにございしょの里（指定避難場所）に走りなさい」という指示が先生から出ます。

「私たちはいつも避難訓練で走っていた避難路を必死で走りました。ございしょの里まで５００ｍ。訓練時よりも足が重く、震えて息が早くなりました。それでも何とか辿り着き、“避難訓練の通りにしていれば大丈夫”と心の中で何度もとなえながら、素早く整列して点呼を取りました」（金野さん）。

少しして小学生の児童たちが合流。すぐに「ここは崖崩れがあるかもしれないから、もっと高い所、山崎デイケアまで避難します」という副校長先生の指示が出ます。

避難時の対応２

◇周囲の状況を把握し 即座に対応 ◇

生徒たちはこれまでの訓練通り、小学生の手を引きながら、さらに５００ｍ先の高台にある介護福祉施設を目指します。ございしょの里が津波にのまれたのは、それから間もないことでした。

「気持ちを落ち着けながら、小学生に“大丈夫だよ、大丈夫だからね”と話しかけました。私たちがしっかりしなきゃと、泣きそうなほど怖い気持ちを、奮い立たせました」（金野さん）

介護福祉施設に到着した直後、施設の裏手から轟音が響き渡ります。「津波が来たぞ。逃げろ！」という大人たちの叫び声。子供たちはさらにその上の国道に向かって無我夢中で走り続けます。もうこれ以上は山しかないという国道沿いの石材店まで辿り着き、子供たちは思わず道路の真ん中にしゃがみこみました。彼らの目の前には、見慣れた街並みが津波にのまれ、押し流されていく信じられない光景が広がっていました。すべてが避難開始から 30 分足らずの出来事でした。

隣接する鵜住居小学校との合同避難訓練
（釜石東中学校　提供）

宮古工業高校による模型を使った津波実演
（釜石東中学校　提供）

「釜石の奇跡」は奇跡ではないと児童が言った